

山と博物館

第27巻 第11号 1982年11月25日 大町山岳博物館



晩秋の青木湖

幻の魚を放つ

紅葉の映ゆる渓谷の水が、ひととき冷たさを増してくると、湖のひめ鱒たちもまた、産卵期の美しい色彩の魚鱗をまとい、おのれの母なる清流を慕って遡上してゆく。

このような現象を、たまたま見かけることの出来る現地の人たちは、それをひめ鱒の唯一の花嫁衣装と呼んでいる。

北海道の、支笏、阿寒、洞爺等の湖に流入する清冽な河川においては、十月から十一月の季節にかけて、ひめ鱒の産卵の時期をむかえる。三年もしくは四年魚の、体長二十cm前後に成長したひめ鱒は、魚体を紅に染めて、ひたすら産卵のための場所を求める。やがて儚ない命の代償とも云うべき産卵が終わると、魚たちの姿もまた、この世界から消えてゆく。

それは、ひめ鱒の最初にして最後の、佳麗な生涯を告げる終焉の色彩でもあろうか。

だがこの青木湖には、魚族の繁殖につながる河川がない。昭和二十九年以来、企業利水による湖面の変動は、ひめ鱒等にふさわしい自然河川機能の殆どを破壊してきた。開発以前の青木湖のように自然沢水が、なんの人為的な障害もなく、そのまま豊かな湖に注ぐ河川環境が失なわれたことは悲しいことだ。

嘗ての青木湖に見る清澄な水質環境の評価は、今日において、なおその質性を保っているが、湖沼学的には貧栄養湖として扱われ、わが国における自然管理の、その水産的価値観から見放してきたことの実害はいないまい。更には近代の自然環境占有型テクノロジーによる、資源取奪の合理主義がもたらした、自然界への侵食度は、この青木湖のみならず、国内の内水面資源を極めて危機的な症状に陥れた。

しかし、この裂傷の湖にも幻の魚の栽培に賭ける夢がある。それはながい懸案の時を経て、青木湖ひめ鱒増殖センターが、この程、湖の西北岸に着工した。幻の魚を放つための、ひたむきな地元民の労苦は、またあたらしい転換期をむかえたのだ。

北アルプス山麓 稲作の変遷

青木 治

江戸時代より続いた人力農法と作神様中心の前近代的農法は明治二十年代には、牛馬による畜力時代に入り、この山麓地帯の栽培技術は、明治二十四年(一八九二)に、長野県の「長野県米作正確額ル可キ米作改良法」を發した。即ち正条植、短冊苗代、塩水選、馬耕などを取入れた西南農法と称する近代的農法に方向を変えている。そして肥料、品種、土地、農具の改良等、明治中後期から大正、昭和(終戦まで)と約六十年間に近代農法を確立している。そして昭和三十年代以降は機械力利用の時代に入り、中農具から大農機具時代へと前進し、それに伴って土地の構造改善、栽培の科学化等近代農法を目指している。収量も一反歩(十アール)十俵(六百kg)前後と江戸、明治期の四倍に達している。

一、苗代

「苗半作」とか、「苗代田半作」とかいつて、苗代における育苗は農家では、昔から非常に大切にしていたので、その間における折願・禁忌・呪法などは昔ほど強かったが、現代は合理的農法の普及とその名残を留めている程度である。

明治の中後期(佐野坂以北の山間部の苗代の小さい所は大正の終り頃まで)までは、畦のあたまで、投播きをする平蒔きであった苗代が短冊苗代に代わり、戦後三十年代には保温折衷苗代となり、次いで苗取直前まで水を苗代に入れれない、陸苗代ともいふべき保温苗代に代わっている。次いで機械田植の普及にともなうて、苗はハウス栽培・電熱利用等大きく、科学化している。肥料も下肥(人糞尿)や、糞灰、草木灰が主であったものが、硫酸や過石の化学肥料を使うようになり、近年は

三要素(N・P・K)の育苗に適度に含ませた完全配合肥料という風に進歩している。

1、良い種籾の確保(種拾え)

○唐箕(とあおり)に二度位かけ、軽い籾を取り除く(風選)。明治の初年頃までは、水選も行い、即ち風選後の籾を水に入れ浮いた軽い籾を取去っていたが、明治の終り頃から塩水選が普及して来て一層良籾を得るようになった。

○明治十八年(一八八五)の稲作十戒(長野県勸業課)の種籾の交換と精選についての記録を示すと。

①種子ハ三、四年毎ニ必ズ居村ヨリ西北ニ当ル遠地ノモノヲ採リ用フベシ、但其用フベキ田ヨリ少シク瘦地ノモノヲ良トス。

②種子トナスベキ種籾ハ未ダ熟セザル前ニ刈リ取りタル種籾ニ掛ケ乾シテ扱キ置キ又、刈取りタル優種及ビ雌穂ノ如キモノ仍ホ扱キテ後選ニ掛ケ乾スベシ。

③小寒ニ入りタルトキハ前ノ種子ヲ取り出し好天氣ノ時ヲトシテ二、三晝夜間寒水ニ浸シ、午前八時頃ヨリ午後三時頃マデノ間再三攪拌シテ陽乾シ復旧旭ニ貯ヘ置クベシ、又種子籾ヲ二、三年以上毛貯ヘ存セントスルニハ能ク乾シタル細砂ニ交ゼ四或ハ桶等ニ入レ置クヲ最モ良トス。

以上は明治初期頃の種籾に対する心得を示したものである。植物の生態研究の進んだ今日とは可成の隔りがあり、直射日光に当てぬようにし、蔭乾を良とするなど前近代的農法が残っている点など面白い。

2、浸種

水浸しといひ、四月十日前後池・小川か、桶・甕に水を入れて浸す。昔は長さ六十cm、

径十五cm位に藁で編んだ小俵か、吠いに入れて、種籾を浸したが、今は蚊帳袋に品種別に入れて十日位浸すが、昔は二十日〜二十五日位であったという。

○大町作方日記(元文元年、一七三六)
○粟林家農業時記(寛政十二年、一八〇〇)大町粟林文書の一部に

「すじ(種籾)池入清明六日目、池中二十日、一俵取二升積、高根(品種名)一俵取に付き三升積に蒔」
とある。二十四季節の清明は、太陽暦四月六日であるから、四月十一日に池に浸種し、池中二十日というから、五月一日まで池におき、五月二日(三日)の八十八夜に種蒔ということになる。

また小谷の戸土では、「水漬け七日(一週間)」とか、昔は「タナケ(ドブ池)二十日」といひ、四月二十日頃付近の雪の消えた頃、吠いに入れて池に浸したという。

3、消毒と芽出し

近年は浸種の前後に、塩水選や馬鹿苗病予防のため、ウスフルン水溶液かペンレート水溶液で消毒している。また発芽を一樣にするため、堆肥熱を利用したり、風呂湯浸法で催芽を行なっている。

4、播種(種蒔き)

爺ヶ岳に種蒔き爺おやの消雪による雪形が現われる八十八夜が昔から適期とされていたが、近年は田植機による機械植の時代となつたので、今では四月中下旬の種蒔きが多い。

苗代の肥料は昔は下肥(人糞尿)であったが、日露戦争後明治四十年代に化学肥料の智利硝石の輸入と、大正時代の硫酸アンモニアの生産が盛んになり、苗代への施用が始まっている。補肥は昔は山へ行き青灰を焼き、それに入糞尿を混ぜて施用している。

苗代田の整地の折田の中央に三十cm位の柳の小枝二本を三十cm間隔に三角形に挿し、たなんば(たなんべ)と称し田の神様の居所とした。また佐野坂以北では、柳かみつぶさの小枝を苗代の全面に一本ずつ二本を等間隔に



短冊苗代とたなんば

挿していた。尚ぬるめ(温水田)と苗代の水口は一月十四日の若年に造つた粥播種二本をたて、その上の十字に焼米をあげ、これも田の神様の居所とした。

○苗代の変遷

平播苗代↓短冊(踏切)苗代↓揚床(短冊形)苗代↓保温苗代↓トンネル苗代↓機械植苗代(電熱線、電熱器利用)

○粟林家農業時記の一節
「すじ蒔(種蒔き)は土用明二十三日前、種籾を浸して二十日が良い、一坪につき種籾七八の積に蒔く可し、古人曰く三月(旧暦)苗代三日遅れ、四月(旧暦)苗代三日早くと言ふは、霜を迎へる。十歩に付き七斗と積るが吉」

二、本田

①田起し・代播き

昔は三本刃の万能鎌で一畝一畝人力で田起しをしていたが、明治二十年代には郡役所の奨励で初めて抱え持立犁の馬(牛)耕が始まり、畜力時代の幕明となった。明治も末年に近づくと、抱え犁に代って、安曇犁とか筑摩



箱足による田踏

犁と称する改良犁の時代となり、更に松山犁と称する精巧な改良犁の普及により、完全な畜力時代に入り、大町の貸馬市も盛んになった。

田の耕作が済むと巧や水口を直し、畦切りをし、万能鎌と巾広の畦塗鎌で畦塗をして漏水を防いだ。次いで、くれこわしまんがなどを用いて、くれこわしをなし、代播きに移る。古くは人や牛馬の足で馬廻し(牛廻し)をし代播きをし、次いで刈藪・刈草・厩堆肥を表土の下に踏込むため、底が下駄の歯のような箱形の田下駄、箱足を用い、更に最後の仕上げのため底の平な大足を用いていた。この山麓地方では、湿田(深田)の多かった小谷四ヶ庄地方では昭和二十年代頃まで用いられていた。明治(中後期)・大正時代から昭和二十年代頃までの代播きは、馬(牛)に引かせたゴシベト車で、荒くれ(一番踏、荒踏)と二番踏(中踏、小踏)をなし、更に大正の頃までは十三車(代車)を馬(牛)に引かせて丁寧に三番踏をなし、枝振で最後に田面を水平にならして整地を終えた。

②肥料

昭和三十年代以後は、ハンド・トラクター、続いて大型の乗用耕運機(トラクター)により、耕起や代播も一回で済むようになった。

貫夕「五貫夕」

と記し、江戸時代から大切な肥料であったことを示している。

○刈藪・厩肥・紫雲英
いずれも江戸時代からの水田肥料で、櫛等(くし)の雑木の若葉を小枝とも刈取って水田に入れる。多くは西山(北ア山麓)の麓の共有林(入会林)の刈藪場から刈取って来た。多くは馬の背の荷鞍に付け、馬の背で運んだ。馬ねぐりは遠い処で一、二回、近くは数回、一頭一回は一駄(六束)であった。

○化学肥料
智利硝石は日露戦争の終り頃から明治四十年代に輸入され、普及し始め、次いで硫酸アンモニア、過磷酸石灰の生産も盛んになり、塩化加里も加えられ、肥料の三要素(N・P・K)の配合も巧みになった。そして大正、昭和と進むに従い、三要素が適度に配合された配合肥料時代となった。

○魚肥(鰯のメ粕)・大豆粕・骨粉・石灰
鰯の頭をさして肥料にしたという笑話もある。鰯のメ粕も用いられた。大豆粕は満洲産の豆板粕を豆板切にかけ切つて用いた。骨粉は牛馬の骨を破砕したもの、石灰は佐崎や塩尻の石灰山の生石灰に水を加えて消石灰にして用いた。

三、田植

田植は人力時代から畜力時代を一気に越え



苗代での苗取り

今のように機械植時代になっている。

前記栗林家農業時局記の一節に、「田植は中(夏至)十日前、古法では夏至より七日前、一反に付早乙女二人、すじ時(種蒔き)より四十日」といつている。苗取については「苗取四十日」とか「四十五日苗」とか、あるいは「さびらき四十九日」などといつて、種籾を播いてから四十五日前後が田植の最適期で、季節的にも、苗のできからいつても植え頃である。

田植に最も良い苗は、太くて固くて長く、良く熟した分蘖した苗をいうが、かかる苗の大きのが四十五日内外ということである。「曲がり八石、曲がらぬ九石」という言葉がある。明治、大正頃までは見当植で、早乙女一人が一畦を植えつつ、次々後を追つて、見当で田植をしたので、後の人ほど畦がくねくねと曲り、真直に植えたのとは、植株が少く、従つて取高も一石少く八石という意味である。

見当植↓片正条植(棕櫚繩等の張繩)↓両正条植(正条植をこぼす)五月とうとうと早乙女は、この山麓地方では、昔は上水内の西山部や越中からの出稼き人を雇つたし、また



正条框

秋祭が済む頃になると稲刈が始まり忙しくなる。昭和初期頃までは、刈干しといつて、稲刈で一握り一握り刈る度に田面に稲を上げ、二、三日太陽に乾かし、乾いた稲はすけ

娘、女衆同志の結い(ええ、ええっ)をして五月の田植を済ませている。若い娘達は田植を機会に、下着や肌着の晒から腰巻、大きな紺紺の着物、いきばかま(もんべ)、手指し(手甲)、赤の襷、菅笠すべて新調である。一枚の田に二十数人の早乙女で次々に青田にする姿は装観であった。早乙女二人で一日一反歩(三〇〇坪、即十町)の田植、即ち一人五町(百五十坪)が一人前であった。

田植には良く縁起を担いだ。「縞苗(葉に白線のある苗)七十七本植えれば思うことが叶ふ」といつて、未婚の女性が田植の最中に縞苗七十七本見つけて、結婚にゴールインしたとか。また「つき手や腰の痛を直すには、水口の田に行つて、人の知らない中に倒苗二本を植えておけば治る」とか。五月六日は「六日田」といつて嫌うとか、「四と九の日は死と苦に通ずる」とか、五月十六日は「お伊勢様の田植」といつて、四ツ前は田の水見も駄目だし「日中田に入つてはならぬ」などである。

四、水田の管理

管理には水の掛け引き・落水と田草取り、及び病虫害の防除がある。現在は田草取りも、病虫害防除も総て薬剤散布である。

昔は田植から十四、五日位たった時に、第一回目の田の草取を行ない、七月下旬、八月上旬の止草まで四回(一番草取、二番草取、三番草取、止草)水田の全面を夏の強い陽さしを背に受けながら這いまわる手取の除草であった。

その中昭和の初頃から、雁爪や田打車の除草機が現われ、漸次手取りの除草から田打車時代となり、田打車も改良に改良が重ねられ、良いものになり昭和二十年代まで使用された。

1. 稲刈

秋祭が済む頃になると稲刈が始まり忙しくなる。昭和初期頃までは、刈干しといつて、稲刈で一握り一握り刈る度に田面に稲を上げ、二、三日太陽に乾かし、乾いた稲はすけ

稲磨りは、明治時代は木臼であったが、次いで土臼が発明され能率をあげた。戦前までの調製順序は、木臼で稲磨りをする→唐箕(とあり)にかけ、風選しぬめかを去る→千石通にかけ玄米と粉を分ける。今は動力(電力)稲摺機で玄米にする。

(北安曇誌編集委員・大町山岳博物館嘱託)

稲の脱穀は大正初期までは、稲扱まんが(千歯扱)で行なわれていたが、大正七年頃から足踏廻転脱穀機が導入され能率をあげた。扱いた稲は筵干しにし、日の出(品種名)の如き有芒種は縦杵や横杵でた、いて、芒毛や穂屑の粉をおとし、(唐箕)にかけ風選し、俵・吹・穀拵に入れ保存した。

現在は動力機の稲刈機(バインダー)、稲刈脱穀併設機(コンバイン)を用いている。



佐野坂以北の稲架



大町以南の稲架

友の会の「黒部深谷自然探索会」に参加して紅葉の立山・黒部深谷を楽しんできました。友の会の行事にはかねてから参加したいと常々思っていました。私の居住している京都からは地理的にも遠く、また時間的な制約のためなかなか参加する機会がありませんでしたが、今回の「黒部深谷自然探索会」にはなんと少しでも参加しようと思いいちました。そもそも私が登山を始めるきっかけとなったのは十年ほど前の夏、一旅行者として黒部立山アルペンルートを通り、その時初めて接



した三千メートル級の山々の景観のすばらしさは、強烈な印象を私に与えました。それがきっかけになり翌年の秋、登山道具を一式そろえ、生れてはじめて自分の意志で山に登ろうと考えました。しかし、なにぶんにも全くの初心者でしたので安全第一を考え、もつともピラーな上高地から穂高へ入山したのであります。そこで見た穂高・槍ヶ岳が気に入り、以来毎年穂高・槍ヶ岳周辺の北アルプス南部の山にばかり登っていました。今年の秋もまた穂高へ入る計画をたててい

たのですが、今回の山博友の会の黒部行のハガキをみた時、十年前の黒部を思い出し、これは是非参加すべきだと考えたのです。さらに私のひかれたのはコースの中に「高熱隧道」という部分でした。以前吉村昭氏の小説「高熱隧道」を読んで、このトンネルが黒部深谷という日本有数の峻険な地形と高熱の中で行なわれた工事は、専門は違っていますが、同じ技術者としてもすばらしいことであり、その文章が今も私の脳裏に強く焼きついています。

黒部ダムへの関電トンネルは広く一般の人々の知るどころではありませんが、それにひきかえ「高熱隧道」の方はルート自体が非公認というところと、戦前の工事ということもあって、小説以外には余り知られていないために、私はこの未知のトンネルを通れることに大きな期待を持ったのです。

前日の土曜日は仕事を手につかず家人からは「子供の遠足みたい」と云われても、ただ「苦笑いでごまかし夜行列車に乗りこんだのです。当日の大町駅に着いた時の寒いこと、体がまだ寒さに順応していないせいかな真冬の寒さを感じ、思わず上はまだ寒いだろうと余けいな心配をしたものでした。ところが、いざバスを降りて長い階段を登りきって黒部ダムの展望台に立つて見ると、寒さなんてかは忘れてしまし、その景観のスケールの大きさは季節の違いはあるにしても前回見た以上のすばらしさでした。そしていよいよ待望の黒部深谷です。それも山が一段とその美しさを増す紅葉の時期を見ることができのです。しかし期待していたほど黒部深谷は紅葉してはいないではありませんか。扇沢及び黒部湖周辺のあざやかなさ比べて黒部深谷のそれは、黒々とした陰うつな感じがまず第一印象でした。今年には異常気象のせいかもしれないが、それよりも私自身が持っている紅葉というイメージがあり、その期待が大きいだけに、落胆も大きなものとなります。でも、

たぶん自分の足で歩いてみればもっと違った意味でその良さが感じられるのではないかと考え、来年の秋は一步一步大地を踏みしめながら、再び黒部深谷を歩いてみようと考えています。

最後に一つ。下流部ではありませんが、また一つ新しいダムが出来ると聞きました。また少し黒部深谷の自然が変化しようとしています。いや、極端な言い方をすれば自然が破壊されようとしているのです。

現在私の最も興味ある事柄が自然保護問題だけに、簡単に聞き流してしまふことができないように思われるのです。たしかに黒部ダムができたことによって、今まで限られた者しか見ることのできなかつた自然の美しさを、一般の人々にも見ることができるようになりましたが、自然の一部を破壊してまで見る必要があるのか、疑問に思えるのです。将来本誌に書く機会があれば、少し考えてみたいテーマです。

今のところ私の考え方の基本を書いて終わりとしします。「過去から受けついで自然は、なんら掛う事なく未来へ受け渡すのが、今を生きる私達の努めではないでしょうか。」(山博友の会々員・京都市)

たぶん自分の足で歩いてみればもっと違った意味でその良さが感じられるのではないかと考え、来年の秋は一步一步大地を踏みしめながら、再び黒部深谷を歩いてみようと考えています。

博物館だより

企画展 灯火の歴史展

10月30日より11月23日まで原始時代のたき火から昭和初期の電灯まで、それらの用具を年代を追って展示しています。

山と博物館 第27巻 第11号
 一九八二年十一月二十五日発行
 発行所 長野県大町市 TEL 〇二二一
 印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館
 大系タイムス印刷部
 定価 年額二〇〇円(送料共)切手不可
 郵便振替口座番号長野四二二一九三